

研究ノート

自然な営みの喪失 自然認識のある側面

花岡 尚之

日本福祉大学 情報社会科学部

Loss of nature in modern way-of-life, its implications

Naoyuki Hanaoka

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 自然観, 風土, 生態系, 自然環境

1. はじめに

自然認識について講義するにあたって、自然が人間に及ぼす影響あるいは自然と人間の関係についてのこれまでの論考を整理してみた。自然を自然現象として分析することは自然科学による自然認識である。これまで人類が展開した科学的な自然認識は科学史として豊かな成果が記録されている。しかし、自然あるいは自然環境が人間に及ぼした影響に注目することは、自然環境についての社会的な関心が高まっているいま、大きな意義があるといえる。つまり、自然環境が破壊されるとこの意味を人間学的に把握することになるからである。

人類の歴史は、まったくの自然な状態にある狩猟採取社会からゆっくりした過程をへて、農耕牧畜社会に変わり、自然科学の発展をうけて産業社会に変わってきた。このような変化の過程は、20世紀に入って加速したが、とくに1950年代以降には急加速している。ローマクラブ「人類の危機」レポート（『成長の限界』、1972）¹⁾は、この変化は幾何級数的成長であるとして、地球の資源や環境には量的な限界があるので、そのまま成長を続けることは不可能であり、あらかじめその事態に対応する英知が必要だと説いた。

よく知られていることではあるが、第二次世界大戦後の新しい経済秩序、それまでの植民地経済やブロック経済を捨てて開かれた自由な経済のもとで、潤沢な

石油資源と科学技術の進歩が未曾有の経済活動の拡大をもたらした。日本については、1955年（神武景気）以降の高度経済成長とともに生れた経済力によって、「日本列島改造」（1972年）という政策名称が象徴するように、人工の手が自然に加えられた。高速道路などの国土交通網が整備され、治山治水事業が進捗し、圃場整備がおこなわれ、ゴルフ場やスキー場が各地に開かれた。いまやこれらの事業の行き過ぎが、環境影響としても財政的、経営的にも指摘されている。

国民の生活も大きく変わった。高度経済成長は日本の産業の国際競争力によって実現したが、その過程では農村から都会への人口の移動があった。農村にあった伝統的な生活、習慣は、都会では変質し、あるいは失われていった。本家分家からなる家族、一族郎党が支えあった家族観が、遠隔地に住むようになって希釈され、ほとんど無くなった。また、家族制度も均等相続が新しい民法に採用されて、総領が家を維持する責任を解消する方向に働いた。生活を支えあうこれらの機能が社会保険制度として社会化され、その結果、核家族化、少子化が急速に進んだといえる。

自然と人工とを対峙させると、われわれの生活における人工的な部分が幾何級数的に拡大していて、自然からの遊離と言ってもいい現象が生じていると考えられる。農業を主体とする経済から工業やサービスを中心とする経済に変わり、大半の人口が農村から都会へ

移った。第一次産業就業者は、1950年の48.5%から1980年の10.9%へと減少した(国勢調査)。もともと自然の中から現れた人間が、人工的な環境の中に入ったとき、人間に変化があらわれるとしたら、そこに自然な営みの意味を認識することができるであろう。

ここではまず、自然環境が生活や文化に及ぼした影響についての議論をまとめ、自然環境の意義を見ることにする。風土論によって、その地方に住むひとの気質や考え方が、気候や植生などの自然条件と人びとの生活の中から生まれたものと解釈できることをみる。つぎにおなじく、気候や植生などの地理的な条件が、古代から現代までの文明の発達に影響していたことを、生態史観によって理解する。さらに、日本がおかれた自然条件の意味を、日本が近代化できた要因を分析した業績のなかから整理して示すことにする。

普通の意味での自然環境とともに、内的な自然環境についても注意を向ける必要がある。身体の中の内なる自然、人と人のあいだの自然な関係も、経済的な豊かさのなかで変わりつつあるとした議論がある。そうだとすれば、内的な自然環境も外的な自然環境も同時進行で変質が進んでいるといえる。それらは全体として、人間が自然な営みを喪失しつつあることを示していることになる。

このような最近の傾向について、その影響を考察することは、漠として捉えようもない。しかし、人工的な世界が拡大を続けていることは否定できない。そして、その影響が理解されたときに、自然環境の貴重さが本質的に理解できたことになるであろう。

2. 自然環境の意味

2.1 風土論

すくなくとも第二次大戦までは、自然環境のなかに人びとの生活があり、そのなかでものの考え方や風俗習慣ができていた。その在り方を考察したものが風土論である。和辻哲郎(1935)の『風土 人間学的考察』²⁾では、アジアの熱帯モンスーン、中東の沙漠、ヨーロッパの牧場が風土の典型として議論されている。自然環境が人間に一方的に影響を与えるのではなく、人間から自然への働きかけもあって、その地方の風土が形成されていると考えている。自然と人間のあいだで熟成した係わり合いがその地方の自然景観を作り出し、人びとの気質を形作ったと考えるのである。

田圃に茅葺の農家は日本の原風景である。真夏に熱帯並みの温暖湿潤な気候に恵まれるという自然条件と、それを利用した稲作という人間の営みが作り出した景観である。周囲の山林は入会地になっていて、薪をとり炭を焼くために使われていた。下草や落ち葉を採取し、育った樹木は伐採して薪にされた。それが里山の自然環境を作り出していた。したがって、田圃や里山は日本の「風土」的な自然環境であるといえる。和辻は食生活の例もあげている。日本人が魚を食べるのは、日本人が魚が好きだからではなく、魚がとれて食べたことによって魚が好きになったのであると。

このように考えると、人びとの生活の基本である衣食住は風土的なものである。さらにいえば、生活を支えている考え方さえも風土的なものである。たとえば、日本人の多くは多神教的である。お釈迦さまも神様もキリストも阿弥陀仏も山の神も水の神も、いろいろな神がおられる。さまざまなものに神聖さを認めることは原初的であるとともに、湿潤な地域では今日まで受け入れられている考え方である。それに対して、乾燥した地域では一神教が生れた。一神教であるキリスト教とイスラム教はユダヤ教から派生したものとされるが、すべて乾燥した暑熱のパレスチナからアラビア半島にかけての地域において生れている。

和辻によれば、アジアの熱帯モンスーン地帯は暑さとともに著しい湿潤で特徴づけられる。この気候が「人間の構造を受容的・忍従的」にしたという。この暑くて湿潤な気候は堪え難いものであるが逃れることができない。その湿潤は同時に自然の恵みをもたらすものであって、植物は繁茂し、動物が繁栄する。時には「自然の暴威」が大雨、激しい嵐、洪水などとして襲うが巨大すぎて抗うことができない。このような自然条件のもとでは、人びとは自然を受け入れ、自然に従うようになるとした。

それに対し、砂漠の生活は水を求める生活であって、「外なる自然は死の脅威をもって人に迫るのみであり」、ただ待っていても水は得られない。水や草地を求める生活は「人間の団体の間のいさかきの種となる。」そのために、砂漠では自然の脅威と戦うとともに「他の人間の脅威とも戦わねばならぬ。」この戦いのために人は団結しなければならない。その「共同の生活を守るために、部族全体への忠誠、全体意思への服従が、砂漠の人間にとって不可欠である。」したが

って、人びとは「服従的、戦闘的」になる。また、全体意思への服従は一神教を生み出すことになったと和辻は解釈している。

和辻が取り上げた三つ目の風土はヨーロッパに見られる牧場である。ヨーロッパの気候は夏の乾燥、冬の湿潤で特徴づけられる。冬の湿潤を利用して麦作が行われ、牧草が育てられる。夏は乾燥しているので雑草がびこることがない。また、ヨーロッパの自然は台風のような脅威はなく、自然の恵みは乏しいながら、おとなしく合理的に見える。そこに合理的な精神が発達し、自然科学が誕生したと述べている。

このような論理で自然の条件をただちに人の精神に結びつけることに飛躍はあるが、地域の文化が自然の条件に密接に関係していることは卓見である。産業化した現代では自然が日々の生活に風土的な影響が少なくなっているが、現代人の精神の骨組みが作られた産業化以前（封建時代）には自然の影響は圧倒的であったと考えられる。なぜなら人は個人としても集団としても経験から学んで考え方を形成しているからである。そのころの日常の経験は農業を主とする生産活動においても衣食住において自然なもの大きな割合を占めていた。そのため地域的に異なる自然環境によって経験の質もまた地域によって異なっていたのである。

2.2 生態史観

『文明の生態史観』³⁾において、梅棹忠夫(1957)は、日本人の生活様式は高度の文明生活であると認識した。その上で、西欧のほかに近代化できたのは日本だけであるのは、明治維新のときすでに近代化できるまで文明が進んでいたからであると考えた。そして高度の文明生活を達成できたのは西欧の真似ではなく、同じような水準にあったものがパラレルに発展したのであるとした。日本と西欧文明が遠くはなれた旧大陸の両端において平行に進化した理由を、生態学の遷移モデルに求めた。遷移モデルは、動物・植物からなる生態系が徐々に遷移して極相という定常的な植物相に行きつくという理論である。たとえば、火山の噴火によって新しい大地ができたとき、乾燥に強い草がまず侵入し、やがて藪になり、樹木が生えてくる、それにつれて生態系も移り変わる、このような変化を遷移という。

ユーラシアの旧大陸を考えると、ケッペンの気候区にあるように中央部に巨大な乾燥地域があり、沙漠とオアシス、ステップからサバンナが広がっている。四大文明はみなこの乾燥地域を流れる大河流域に栄えた。古代の技術でもって農耕ができる自然環境はこのようなところであった。灌漑による農耕が行われ、城砦に囲まれた都市文明が栄えた。ところがこの地域の文明は草原の遊牧民による破壊と征服を免れることはできなかった。そのため文明が発展しても、社会が成熟して封建制に移行することなく専制的な体制がこの地域ではつづいた。それに対し、旧大陸の両端では、森林に覆われて文明の発達が遅れたが、ある程度の技術力ができた段階では、温暖で雨量もあり土地も肥沃であるなど恵まれた条件のもとで文明が発展した。これらの文明が遊牧民と出会ったときには打ち負かすだけの実力ができていた。日本についていえば鎌倉時代に元寇、モンゴルの来襲を跳ね返すことができた。

この梅棹の考え方は極めて大づかみではあるが、ダイナミックに文明史を捉えている。生態系の変化として文明史を考えるということであるから、技術力を持った人間も生態系のひとつ要素であり、人間も含めた生態系が遷移してくということになる。そして少なくとも近代史が始まるまでは、自然環境と文明の在り方は密接に関係していたとする考え方が基底になっている。このことは、和辻が、気候をはじめとする自然の条件と人間の営みによって風土が形作られ、風土的な性格ができるとする考え方と通底するものがある。

2.3 勤勉の精神

明治維新のときには、科学技術はともかくとして、文明の水準は西欧と変わらないところまで発展していたと生態史観では考える。そのような発展をもたらした生態的な日本の条件は何であるかがつぎに問われる。

山本七平(1979)は『日本資本主義の精神』⁴⁾において、職場を精神修養の道場のように捉えて、仕事に精神的な充足を求める伝統が日本にはあったことを指摘している。これは勤勉の精神といってもよい。いい加減な仕事が精神修養になる訳もないからである。職人はたんに一人前になっただけでは満足ではなく、その道に励んで匠を目指すものであるとされている。最近では食にたいする関心が高まっているが、料理職人が

味の究極をもとめて山にこもって修養するドラマが人気を博している（連続テレビ小説「ほんまもん」, NHK, 2001-02）。大石慎三郎（1977）⁵⁾によれば、江戸時代の始まりは耕地面積が急拡大した時期でもある。1600年ころに1,635千町歩であったものが、1720年ころには2,970千町歩に拡大した。これは明治初期（1874年ころ）の3,050千町歩に近い。また明治以前の主要な用水土木工事の35.6%が、1596～1672年の間におこなわれている。そして河川の改修と新田開発による耕地の拡大は1650年ころには頭打ちになった。

「このとき以降日本農政の基調は耕地面積を増やすことによってではなく、行き届いた配慮と、より多くの労働力投入することによって単位面積の農地から一粒でも多くの収穫を得ようという本田畑中心の“精農主義的な農法”へとその重点が移ってゆくのである。」と大石はのべている。耕地拡大によって「小農自立」がすすめられ、家族が丹精して農業を行うようになった。家族という共同体を繁栄させるために労働集約的な農業をおこなっていた。そのような中から労働を尊ぶ考え方が生れてきた。

速水融（2000）⁶⁾は、兵農分離政策と参観（勤）交代制度の確立によって、城下町、宿場町など都市に住む人口の割合が江戸時代にも明治初年とおなじ約15%であった推定した。そして、その都市の消費生活をささえる貨幣経済が存在して、農民は年貢や自給のほかこの市場に向けた商品作物の生産を行っていた。「この市場向けの生産こそ、農民の生産意欲をかき立て、当時として、なし得る限りの創意工夫、勤勉努力をもたらす結果となった。」とのべている。

日本の四季の変化が日本人を勤勉にしたとする議論もある。寺田寅彦（1935）⁷⁾は、「温帯の特徴は季節の年周変化である」として季節のめまぐるしい変化に注目し、「天気の変化は人間の知恵を養成する。周期的あるいは非周期的に複雑な変化の相貌を現す環境に適應するためには人間は不断の注意と多様なくふうを要求されるからである。」と述べている。日本には熱帯のような夏もあれば冬支度を必要とする厳しい冬もある。季節の移り変わりが生活にも農作業にもおおきな影響をあたえるので、日本人は季節に敏感になっている。挨拶に天気のことを言うのも、季語を織り込んだ俳句に人気があるのもそのためである。

日本の稲作は、熱帯の原産である稲を北限の地域で

栽培している。夏の太平洋高気圧におおわれた高温湿潤の季節に稲を実らすためには、春先から季節をおって着実に農作業を進めなければならない。農作業が遅れば秋の台風の際に収穫物をすべて失う危険が大きくなってしまう。夏の炎天下の除草はいくら辛くてもこなさなければならない。このような事情は、同じ稲作といっても熱帯地方のいつでも種を蒔くことができるころとはまったく異なるものである。

3. 内的な自然環境

3.1 群れ社会

人も自然の産物である。人の体は動物のそれである。そして人は類人猿と同じように群れ社会を形成するタイプの動物である。ところが人の赤ん坊は、群れ社会を形成するように出来上がって生れ出る訳ではない。生れたときに脳細胞はできているが、脳細胞のあいだの回路がまだできてはいない白紙の状態にある。生れ落ちた瞬間から環境の刺激を受けて徐々に回路が形成され、知能がうまれてくる。乳幼児が母親の声を聞き、おもちゃをいじっている間に回路が結びついてくる。新しい回路ができると新しい言葉が理解でき、新しい遊びができるようになる。このような回路は8歳くらいまでに基本が出来上がるので、それまでの幼児教育が大切であると言われている。

澤口俊之（1999）⁸⁾によると、知性は8つに分けられて、言語的知性や絵画的知性などとともに社会的知性や感情的知性がある。これらの知性はある程度独立して働き、脳のある領域に回路が形成される。そのため、8歳くらいまでにその知性について環境からの刺激が不足すると回路が十分にはできないことになる。社会的知性や感情的知性は、群れ社会を形成するのに必要なものがあるが、育て方によってこれらの知性の発達が不足し、群れ社会の仲間になれない脳ができあがる可能性がある。極端な例であるが、「狼っ子」のカマラは、生後6ヶ月から7年間を狼と暮らしたが、人間の世界に復帰して6年後になっても数十語をあやつるだけであった（島崎敏樹, 1974）⁹⁾。

これまでの伝統社会では子どもが群れ社会で生きてゆけるようになるのは自然のことであった。ごく普通に子育てをすれば、社会的知性や感情的知性が形成された。ところがいまの日本社会では、子育ての環境において群れ社会の特性が消失した、あるいは薄められ

た。都会化、核家族化、少子化によって子どもの数が減り、近所の遊び場もなくなって、子どもが接することのできる兄弟、近所の子ども達、おじさんおばさんが非常に少なくなった。かつては普通にあった、年少から年長までを含む子どもの群れの中で教え、教えられて遊びまわった経験がなくなった。そのために、社会性が養成されず、社会へ入っていけない青年が数多く現れるようになったと解釈できる。

3.2 身体の中での自然

藤田紘一郎(1994)は、『笑うカイチュウ 寄生虫博士奮闘記』¹⁰⁾によって、人間の体内環境が変化したためにアレルギー反応の現れ方が変化してきているとのべている。寄生虫を体内に持っている人が普通にいた時代には、寄生虫からの排泄物にたいする免疫反応に人の体は忙しかった。ところが寄生虫が駆除されてしまうと、人の免疫系は花粉に免疫反応を起こすようになって、花粉病が広がったというわけである。人は寄生虫ばかりではなく、さまざまな細菌と腸内で共生関係をもっている。健全な腸内細菌叢が、雑菌が腸内で繁殖することを妨げ、毒素などの発生を防いでいる。その腸内細菌叢が精神的なストレスのために自然には保たれなくなって、乳酸菌発酵食品や乳酸菌製剤、乳酸菌の繁殖を促すオリゴ糖に関心がもたれるようになった。このことから、身体の中にある自然もストレス社会では脆弱になっているといえる。

4. 自然からの遊離

和辻がヨーロッパへ旅行した時代に比べると、われわれの生活環境は著しく人工的になっている。大都市は高密度化して、土地も水も緑も、あらゆるものが人為的なものとなってきた。オフィスでも住宅でも冷房と暖房が普及して、一年中変わらない環境で生活している。海外へ旅行しても航空機の中やターミナルビルは北の国でも熱帯でも同じように空調されている。着いたホテルでも空調が整っていて、世界共通の服装で過ごすことができる。むしろ熱帯にあるホテルのほうが寒いくらいである。

スーパーマーケットに並ぶ食料品は、きれいにパッケージされて工場生産されたものと変わらない印象さえある。おもな食品は一年中同じように陳列されて、季節の変化も地方ごとの特色も見出せない。実際、か

なりの種類の野菜が、人工的に温度と光と湿度を調節し、さらには二酸化炭素を大気よりも濃く環境制御した「野菜工場」で生産されている。

住環境についても、マンションや戸建て住宅が密閉度を高め、外から閉ざされた空間になってきている。玄関から外に出ると空間が高度に使われていて、人びとや子どもたちが交わる遊びの空間もない有り様である。住宅の密閉度の高さは、人びとのあいだの親しさを減らす方向にはたらく可能性もある。夏の夜長に窓を開け放って虫の音を聞くなどという風流は消えて、締め切ったエアコンの部屋でテレビを楽しむことが普通のこととなった。

このような変化が人間におよぼす影響は何かがここで問われなければならない。科学技術が発達し、社会が豊かになって、物質的にはなにに不自由なく生活できるようになった。その一方で、何も失うことなく済んでいるのであろうか。そもそも自然とはわれわれにとってどのような意味があるのであろうか。もともと人類が自然のなかから生れてきたことから、自然な営みを喪失することは、自らの存立基盤を失うことに等しい、と哲学的に考えることもある。熱帯雨林が失われることは、生物の多様性ももっとも豊かに見られる環境が失われることで、将来に活用できるかもしれない生物資源、遺伝資源が失われることであるという功利的な議論もある。

風土論的、生態史的に考えれば、生活環境、生産活動の環境が変われば、人々の生活観、文明の在り方は変わらざるを得ない。現代の生活環境や生産活動は、自然からの影響を少ししか受けられない地域性の少ないものになっているので、文明の在り方は地域性のないものになる傾向にあると考えられる。たとえば東南アジアの大都市バンコクは、熱帯モンスーン地域にあり、雨季と乾季はあるものの常夏である。人びとの生活はノンビリしたもので、街行く人もゆっくりしていた。ところがオフィスに冷房が入り、冷房のある車で通勤するようになると、サラリーマンはネクタイに背広の生活になった。その結果、通りを歩くときの速さも東京のサラリーマンと同じようになった。このように言われるほどタイの都会生活は現代化し始めている。都市は工業やサービス業を主体としているので、都会人の生活は世界中で類似していて、各地の文明は都市を中心に似たものになる傾向にあるということが

できる。

科学技術は善悪の価値判断に関わらない。原子物理学の成果は、原子爆弾にも原子力発電にも各種の検査装置処理装置にもなっている。医学の進歩は、人命を救い人口爆発をもたらす高齢化社会の喜びと悲惨をもたらした。同じように経済の原理も善悪の価値判断に関わらない。市場のメカニズムは競争的な環境を提供するだけで、競争に打ち勝ったものもいいとも悪いともいえない。したがって、科学技術に基づいた経済活動をもたらした現代文明は、科学技術に内在する自己発展の論理に従っているだけのように見える。そしてますます便利で、人工的、均質な社会が、地域の価値観に関わらずひろがってゆく。

このことは第一次産業をおもな生活手段とした時代とは大きな違いである。農林業は自然の営みを利用し、自然の営みの一部となって生活が成り立っていた。そこでは自然と調和した持続的な生活、安定した生態系があった。古代文明が乾燥地域における灌漑によって耕地に塩害が発生し、森林の樹木が伐採されて資源がなくなったときに滅んだように、調和が崩れると破綻にいたった。このことは、自然な営みと調和するように強制力が働いていたと見ることができる。もっと小さな規模でも、自然と調和しない営みは自然災害などのかたちで排除されたであろう。

現代社会、とくに大多数をしめる都市生活者と自然との結びつきは希薄になっていて、自然から強制されることはなくなってきた。自然との調和、持続的な自然との関係も、意識的に考えない限り自動的に出来上がるものではなくなっている。あるいは、人間の活動様式の変化が早くて、自然からの応答が明らかになる前に次の変化が積み重なって、つねに過渡的な状態にある。いま強く意識されている自然からの強制力のひとつは地球温暖化である。それへの対応として、エネルギーの利用と気候変動のあいだで妥協する必要が合意されている（気候変動枠組み条約の京都議定書、1997）。しかし、実際のところ、地球温暖化対策でさえ、その必要性は自明ではない。高緯度地方では温暖化によって農耕適地が拡大するなど、気候最適化といえる要素があるからである。途上国では温暖化対策よりも経済発展である。さらに、温暖化は短期的な自然現象であるという主張もある。熱帯雨林の保護やアフリカのサバンナのライオンやキリンが住む生態系の保

護は、その必要性をだれでもが認めるものではない。生物の種を絶滅させてはならないという情熱や観光産業を振興するための政策、森林の環境保全機能の啓蒙などがあるが、必要性が理念的に理解されるものである。

このように見てくると、地域の自然環境も人の内的な自然環境も、もはや予定調和的にものごとが自然によって自動的に調節されて、生態系として持続的な状態が実現すると考えることはできない。風土論的な意味で自然との成熟した関係が失われたいま、自然は人によってデザインされるものになってきた。デザインという言葉は人為的な意味合いがあってこの場合には好まれないかもしれないが、自然を保護するということが自体がデザインになっている。そして自然をデザインするときに科学的な知識が必要であるとともに、自然と人とがどのような関係にあるべきか、現代において自然の価値とは何か、など基本的な認識を明確にしていかななくてはならない。

引用文献

- 1) D.H.メドウズ, D.L.メドウズ, J.ランダス, W.W.ベアラング三世, (監訳) 大木佐武郎: 成長の限界, ローマクラブ「人類の危機」レポート. ダイヤモンド社 (1972)
- 2) 和辻哲郎: 風土 人間学的考察 (原著, 1935). 岩波文庫 (1979)
- 3) 梅棹忠夫: 文明の生態史観 (原著, 1957), pp. 73-111, 中公文庫 (1974)
- 4) 山本七平: 日本資本主義の精神. カップビジネス, 光文社 (1979)
- 5) 大石慎三郎: 江戸時代. 中公新書 (1977)
- 6) 速水 融: 非西洋型農業革命. 西尾幹二 (編)「地球日本史」, pp. 245-364, 扶桑社文庫 (2000)
- 7) 寺田寅彦: 日本人の自然観 (原著, 1935). 寺田寅彦全集 第10巻, pp. 200-231, 岩波書店 (1961)
- 8) 澤口俊之: 幼児教育と脳. 文春新書 (1999)
- 9) 島崎敏樹: 生きるとは何か. 岩波新書 (1974)
- 10) 藤田紘一郎: 笑うカイチュウ 寄生虫博士奮闘記 (原著, 1994). 講談社文庫 (1999)